



こぶん つく 古墳を作ることをなぜやめたの

おお じいん た 大きな寺院が建てられるようになった

3世紀ごろから8世紀ごろにかけて、日本の各地ではさかんに死者をほうむり、その霊をなくさめるための古墳が作られました。大きな古墳を作るには、大ぜいの土木技術者や労働者が必要になります。このような人々を使うことができる、王や豪族のような有力者でなければ、古墳を作ることはできませんでした。古墳は、豪族の力を示すものでもあったわけです。

6世紀に、日本には仏教が伝わってきました。それをきっかけに、大きな建築物である寺院が建てられ、死者をとむらうようになりました。6世紀の終わりに、奈良に建てられた法興寺は、人々が見たこともないような大きな寺院でした。

けんちくぶつ けんりよく しめ 建築物によって権力を示す

この法興寺の完成をきっかけに、各地の豪族が、次々に自分の領地に寺院を建てるようになりました。それまで、古墳の規模が権力の大きさを示していたのが、りっぱな寺院を建築することによって、もっている力を示すようになったのです。

もっとも、6世紀に寺院ができはじめてからも、地方の豪族によって、8世紀ころまでは古墳も作られつづけました。しかし、仏教の伝来以来、しだいに古墳は築かれなくなっていきました。（監修・保岡 孝之）

